

## 新収日本地震史料を読む その 3

首藤 伸夫\*

## 1. はじめに

地震で山腹が崩壊し、川をせき止める天然ダムの事例を取りまとめたのが、第 2 節である。一番有名なのは犀川の虚空蔵山崩れであろう。ダム崩壊で貯まって居た水は波状段波となって下流に大被害を与えた。天然ダムがすぐ崩壊するとは限らない。形成から 40 年も過ぎてから壊れたものもある。第 3 節には、津波の予兆や予報、第 4 節には津波の作った地形などの例を示している。

## 2. 天然土砂ダムの生成と崩壊

## 2-1 天然ダムの発生事例

地震で山崩れが起き、川をせき止めたのが天然ダムである。それに水が貯まり、川沿いの村々は水没する。天然ダムを切り崩し、通水する努力がなされるが、それに成功せず、ある日一気に崩れると、巨大な段波が下流に大被害をもたらす。この節では、こうした事例を取りまとめる。

表-1 天然ダム発生事例

発生日月	天然ダム形成場所	崩壊年月日	被害
寛文 2 年 6 月 1 日 1662 年 6 月 16 日	安曇川上流の朽木谷 <b>町居崩れ</b>	15 日で満水となり、切れ始める。	500 人
天和 3 年 9 月 1 日 1683 年 10 月 20 日	栃木県 <b>五十里</b> (いかり) 村	40 年後	推定 12,000 人
宝永 4 年 10 月 4 日 1707 年 10 月 28 日	山梨県身延町 下部・湯之奥 静岡県富士宮市 白鳥山 静岡県静岡市 <b>大谷</b> (おおや) <b>崩れ</b> 高知県越知市 仁淀川鎌井 山梨県早川町 八潮崩れ	ダム湖は土砂で埋没 三日後に崩壊 徐々に堆砂 四日後に崩壊 天然ダム形成せず	
享保 3 年 7 月 26 日 1718 年 8 月 22 日	天竜川支流遠山川 <b>盛平山</b>		
寛延 3 年 4 月 7 日 1750 年 5 月 12 日	庄川 五箇山の <b>祖山</b>	13 日後	
宝暦元年 4 月 26 日 1751 年 5 月 21 日	上越市 <b>名立</b> 桑取川		死者 58 人
弘化 4 年 3 月 24 日 1847 年 5 月 8 日	長野県 岩倉山別名 <b>虚空蔵山</b>	19 日後	人的被害 8 千 ~ 1 万 2 千人
安政 5 年 2 月 26 日 1858 年 4 月 9 日	富山県常願寺川上流の <b>鳶山</b> (とんびやま)	3 月 10 日 4 月 26 日	2 度目の出水で 死者 140 人, 負傷者 8,945 人

\* 東北大学名誉教授

## 2-2. 町居崩れ (1662 年)

寛文二年五月一日 (1662.6.16) に発生した地震の影響は、山城・大和・河内・和泉・摂津・丹波・若狭・近江・美濃・伊賀・駿河・三河・信濃・伊勢・武蔵の広範囲に及び十二月まで余震が続いた。

これで発生したのが町居崩れである。明王院文書十一 (抜書卷二十九) には、「当五月朔日午上刻ニ前代未聞之大地震有之、山々震崩シ谷々之土石大水ニ而流出、坊村之田畑等甚亡所ニ成也、于時明王堂并前之石舞台次ニ大橋寺廻リノ石垣悉震崩レ庵室等迄震曲殊更榎村東之大峯十三町程上ヨリニツニ破レテ榎町居両村悉ク打埋則大川ヲ閑留当寺ノ屋敷迄水閑上テ坊村之在家等不残浮流ヒ畢然而同月十五日辰下刻ニ右之閑水口大キニ切レ俄ニ水引雖然其跡水町居村ノ寺ノ下迄水有之大池ニ成也、其後当住大樹坊栄心口堂社寺庵室等之加破損令普請、依此当六月会或い無相違相調行者中令參籠則開。三尊御戸 (一) 奉

拝見処ニ少茂御損シ無之行者中何茂不思議ノ思ヲ成シ令大悦者也」 (新収第 2 巻, p.263)

天然ダムが出来、それが 15 日後に決壊したことを伝えているが、被害などについての言及はない。文献 1 には詳細が記述されている。

「1. 寛文二年 (1662) の近江・若狭地震による大災害

宇佐美 (1996)、中央防災会議・災害教訓の継承に関する専門調査会 (2005) によれば、寛文二年五月一日午之上刻 (1662 年 6 月 16 日 11 時頃)、京都、大阪、滋賀、福井地域を中心として、近江・若狭地震 (琵琶湖西岸地震, M7.1/2 ~ 3/4) が発生しました (図 1、井上・今村, 2002、今村ほか, 2002、井上, 2006)。琵琶湖西岸では田畑が湖中に「ゆりこむ」とあり、検地史料などをもとにした分析から水没現象があったようです (萩原ほか, 1982)。安曇 (あど) 川上流の朽木谷 (くちきだに) では、町居崩れと呼ばれる大規模崩壊が発生

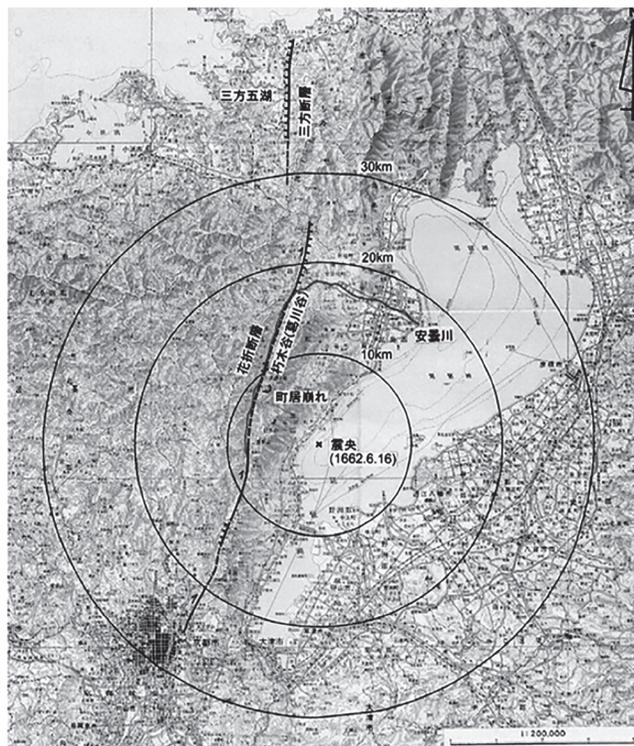


図-1 近江・若狭地震と町居崩れの位置 (今村ほか, 2002)

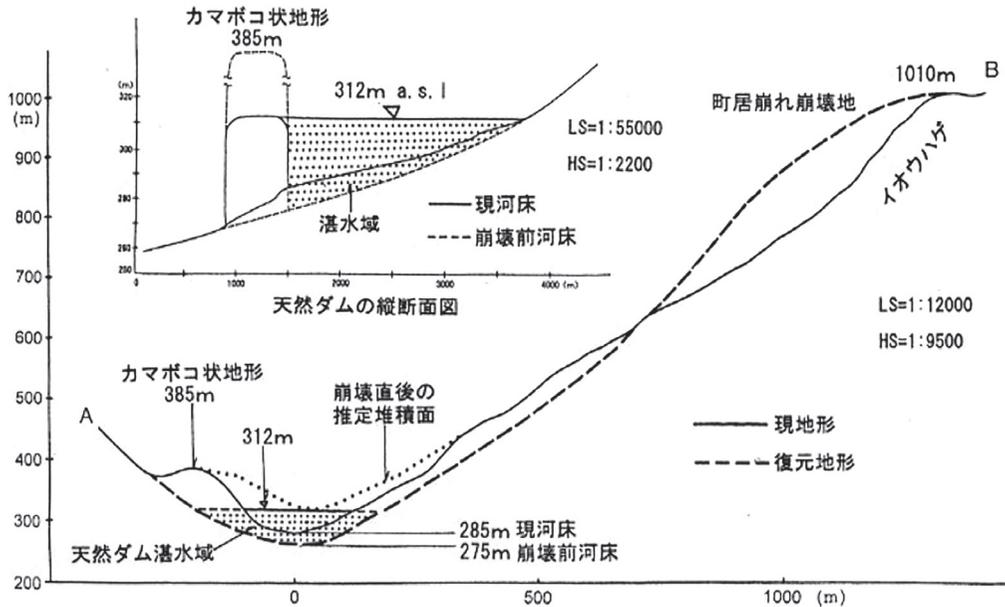


図-2 町居崩れの推定断面図（出典：今村隆正ほか，歴史地震，第18号，pp.52-58,2002）（文献2）

し、その崩壊土砂によって、安曇川の河道が閉塞されて、天然ダムが形成され、約560人が犠牲になりました。」

そして、

「3. 町居崩れによる天然ダムの形成と決壊

図2に示したように、近江・若狭地震による最も大きな土砂災害は、朽木谷町居村・榎村（現在は大津市梅ノ木）対岸の斜面です。『明王院文書』によれば、『五月一日に大地震があり、イオウハゲと呼ばれる斜面が大規模崩壊（深層崩壊）を起こし、崩壊土砂は土石流となって流下しました。坊村の田畑は壊滅、明王院（図3、4では堂と記載）前の石舞台・大橋・寺周囲の石垣も崩れました。榎村東の大峰が十三町程（1,300m）上より二つに破れて、榎・町居の両村を埋没させました。崩壊地（イオウハゲ）では、両所より割れ出で、谷へ崩れ落ちて、谷を埋め高山をなし、その高さ二町（200m）、長さ八町（800m）、家数50軒、300人のうち生存していたのは37人のみでした。土砂に埋まり、遺体も見えない状態で、家々もすべて埋没した』と記されています。崩壊土砂は安曇川を河道閉塞し、天然ダムの湛水は明王院（堂）の前の石段まで

達しました。」としていますが、上記の新収第2巻の明王院文書には犠牲者数などは記載されて居ません。

2-3. 五十里湖崩壊（1683～1723）

地震で山が崩れ落ち、川をせき止めるのが自然土砂ダムであり、やがて貯まった水がダムを越えて流れ落ち、その流水で土砂ダムが急激に崩壊し、段波となった水が下流に被害をもたらすのである。後に述べる鳶崩れ、虚空蔵山崩壊などが良く知られている。これらはダム形成からほどなくして発生したが、記録に残る最古のもの、鬼怒川の支流男鹿川の五十里湖崩壊は、ダムが出来てから40年後の崩壊であった。

〔下野国誌材料 二〕（補遺 pp.262-263）には、

「天和二年壬戌〇〇（ママ）月日不詳塩谷郡地震戸板山崩壊男鹿川塞り五十里村湖水トナリ人畜多ク死ス後享保八年（1723）癸卯八月十日ニ至リ湖口崩壊又居村トナル所謂五十里ノ温泉ハ此時ノ噴出スル所ナリト云フ全」と記されている。

この堰き止めの発生は



図-3 五十里湖崩壊関連地図(Google earth より作成)

〔会津藩家世実紀 四〕(新収補遺 pp.258-259) に

「九月朔日 日光御領戸板山地震ニ而崩、御預所五十里川突溜新湖出来五十里川ハ五十里村分高原峠之続布坂山と日光御領川治村分戸板山之間を流候処、今曉丑之刻日光山大地震いたし漸々御普請出来候石垣不残崩、相輪塔も押倒し、当五月之地震ガハ別而強キ由、其辺之者とも申候程之事ニ而、戸板山頽れ布坂山へ押懸り、川なり四百拾間程高サ十式三丈計、大石大木夥敷落重り流末を突溜、布坂山之麓山頂ガ高ク成候得は、暫時之間忽水湛五十里村水底ニ成一里程之湖水ニ相成候、村高百式拾石余家数三拾壹軒、水難を避迎中井と申所へ仮ニ小屋を懸ケ引移候事ニ相成」などと記録されている。

これにより、会津と江戸を結ぶ会津西街道が使えなくなった。塩原町横接郷土史研究会〔横接郷土史〕(新収補遺 p.262) に

「一六八三 天和三年

地震により山崩れのため五十里に湖が出来て、会津西街道(南山通)通行出来なくなった。(後に舟で渡る)」と記されている。

ダム発生から崩壊までを解説したのが荒川秀俊(文献3)である。それから主要部分を引用する。

「昔から当村は会津領に属し、永く会津藩主松平氏の領有するところであった。川に沿って県道があるが、これが昔から会津若松と江戸をつなぐ会津西街道を改修、拡張したものである。昭和に入って五十里ダム建設に際し、一部道路のつけかえをやり近代路線が開通し、会津から鬼怒川温泉に達するバスが通っている。

天和3年、栗山村西川<sup>かつろう</sup>小字葛老で葛老山に山津波がおこって、男鹿川(一名五十里川)の全流を遮断したため、前記の海跡という盆地に水が満ち、

『湖水長五十町、往還筋四拾七町、西川村方三拾七町、幅八丁より三拾七間迄御座候御事』(相定申扱証文之事 元禄十二年 五十里赤羽記録)

という大湖水ができた。このため川筋の三依村五十里と栗山村西川の部落は湖底に没し部落民の大部分は上の屋敷というところに移転し、9家だけは船頭に転業し、四十数年間、この湖上で4艘の小舟を操り、その駄貨で、生計をたてていたということである。

土砂の崩壊によって堰き止められてできた堰止湖であるから、このダムが欠潰するおそれがあることは当然考えられることであった。このために会津藩では五十里番所の支配頭、

高木六左衛門に命じて掘割をつくり、五十里湖の水を切り落そうとした。

番所跡（いまは関所跡といわれているが会津西街道の関所は山王峠の裾、横川にあったのである）はいま五十里掘割にあつて、布坂山（一名腹切山）にわずかな墨祉が残っている（写真（2）参照）。ところが、掘割工事は難渋をきわめ、藩主より給せられた金子3,000両を使い果たしても完成することができなかつたという（高橋英男氏の説）。高木六左衛門は失敗の責任を負って、切腹をして果てたが、『六左の墓』（写真（1）参照）は腹切山の番所跡の傍にある。ところが、それから1年余りたった享保8年癸卯8月10日（西暦1723年9月9日）、海尻うみじりにおいて欠潰し、ここに有名な五十里湖洪水がおこつたのである。欠潰場所は掘割跡（写真（2）参照）よりも西側の葛老山の山崩れのあつたところで起つた。この欠潰してできた川の上にはいまでは立派な橋が男鹿川の上にかかつて観光名所となっている。『栃木県市町村誌』によると、『海拔二百米の氾濫源をもつ湖水の水は、さながら夕立雲の様に』

なつて下流におしだし、いわゆる鉄砲水となつて、栗山村の土呂部、上栗山、大川筑や藤原村の鬼怒川沿いの部落や田畑を一呑みにし、舟生、大宮、絹島、羽黒などの沿岸地帯に氾濫した。宇都宮でさえ、3尺におよぶ出水で、下町の住民は八幡山に避難したほどの大洪水であつた。これが有名な五十里洪水で、このときも湖底になつていた五十里と西川の部落は干潟になつて、海跡という名がつけられ、部落民は故旧の地にかえることができた。

星うつり、昭和になつて、治水のためと多目的の水利のために、五十里ダムが建設され、五十里と西川の部落をつつむ海跡はふたたび人工の五十里湖の湖底に没してしまつた。

また、下流における五十里洪水についての『栃木県市町村誌』栗山村の部の叙述によれば、

**土呂部** 五十里洪水で生き残つたもの僅か十余名という打撃をうけた。

**上栗山** 享保八年の洪水禍により殆んど全滅に瀕した。

**大川筑** 洪水により悉く流失の憂目を見ている。

**西川** 天正三年の大地震により山崩れで川がせきとめられ、全村湖底に没したが、享保八年この湖水が押し流されて再び村が現出した。

『栃木県市町村誌』の絹島村の部によれば、東は氏家、肘内より西は宇都宮、横川に至る東西六里。肘内、羽黒村中里に至る約二里の間は漫々たる大洪水と化し、深さは約三尺以上の浸水であつたという。

遺憾ながら被害の詳細な資料はないが、『氏家大谷川通御領分中流死者九百九十七人御座候』と古里郷土誌にある。河内郡絹島村上小倉では二十三人の流死者を数えているので、人畜、家財建物、田畑等の被害が如何に激甚であつたか、ほぼ想像し得られるであろう。

田代長吉氏の大著『栃木県史』には延々31頁におよぶ『五十里洪水』の叙述が載っている。いま田代氏によって述べてみると、五十里湖の出現したのは、延宝4年か5年であるとし、享和8年8月8日からの降りつづく霖雨で増水し、地盤がゆるんで、一時に崩壊して奔流となつて、鬼怒川沿岸の村落を洗いさつたのであるという。

藤原の人々は、山のような濁流が押し来てきたときは、初め水とは思わず、『黒雲』であると思つたが、大洪水であつたという。

その濁流は滔々として、下流の塩谷郡大宮村、氏家町、阿久津村、河内郡羽黒村、絹島村、田原村、古里村、平石村、瑞穂野村、本郷村、芳賀郡清原村、豊岡村、篠井村、豊郷村、横川村、宇都宮市などに浸入し、東は氏家、肘内から、西は宇都宮、横にいたる東西約6里、肘内、中里にいたる約2里の間は漫々たる大湖水と化し、死傷者の数などは夥しい数にのぼつたということである。

田代氏によれば、この鉄砲水の速度は誠に大きく、洪水波が来たのは、藤原が午後3時頃、大渡が午後4時頃、小林が午後5時頃、氏家

が午後 6 時頃であったという。

こういう不意の鉄砲水では、避難のすべはまったく見つからない。

五十里湖洪水の後、筏乗りをしていた多平、伝次郎の 2 人によって男鹿川と鬼怒川の合流点にある浅間山の岩間で温泉が発見された。五十里湖洪水のさい、山崩れで川筋が急に変わったところに見つかったのだという。これがいま有名な観光地になっている川治温泉の発見物語である。

\*\*\*

さて五十里洪水のおこった日について、『栃木県市町村誌』に浜崎宗獄氏らは享保 8 年 (1723 年) 8 月 10 日とし高橋英男氏らは同年 8 月 15 日月明の夜としゃれている。

洪水の起った日付においては大差がないのであるが、葛老山の山崩れのあった日付については『栃木県市町村誌』は天和 2 年 (1682 年) の夏、もしくは天和 3 年 (1683 年) の大風雨によるとし高橋英男氏は寛文 7 年 (1667 年) の大風雨によるとしている。

田代善吉氏は延宝 4～5 年頃 (1676～77 年頃) の地震のために起ったとしている。そうすると五十里湖は 40～56 年にわたって堰きとめられていたことになる。現地における掲示はすべて藤原町観光協会々長高橋英男氏 (川治温泉ホテル社長) の説にもとづいて記述されている。

\*\*\*

現地ににおいては、数度にわたる火災、もしくは明治維新のさいの兵火によって、明治以前の古記録は失われ、ほとんど見当らない。したがって、これまで述べた五十里湖洪水に関する記事はほとんどいい伝えにもとづいて書かれたものである。

私はいま、手のおよぶかぎりの資料にもとづいて、五十里湖の生成およびその決潰についての日付、原因、およびその災害について考察をこころみてみたい。

日本の名ある暴風雨および大地震に関する史料を撿してみると、五十里湖が出現したのは、天和 3 年癸亥 (西暦 1683 年) であるように思われる。『武江年表』によれば、天和

3 年 8 月、『近世出水』とある。これを裏書きするものは、日本交通史の権威、下野史学会長大島延次郎博士の指摘された『三依郷絵図』の記事である。『三依郷絵図』は天保 9 年巡見使派遣に際して、巡見に便ならしめるため三依の道中を描き出して若松役所に提出したものであるから、旅行の伴侶として恰好な絵図である。この図は三依郷の五十里から書き起されているが、それに

『天和三年日光御神料戸板山崩レテ水道ヲ塞キ大湖トナル。享保八年山麓ヨリ水抜ケテ陸トナリ再旧地ニ民家ヲ営ム』とあるのが、決め手になる。宜しく五十里ダム周辺に掲げられた五十里湖観光案内の説明書は書き改めらるべきである。

栃木県の hp (文献 4) の記述は下記の通りである。

### 「激動とともに生きる五十里

#### 1. 五十里湖の出現

天和 3 年 (西暦 1683 年) 9 月 1 日、マグニチュード 6.8 の大地震が日光・藤原・南会津地方を襲った。昭和 24 年の今市大地震がマグニチュード 6.4 と記録にあるがそれと同規模以上のものと推測できる。

これにより、日光御神領、西川村 (現日光市栗山) の葛老山が崩壊し、流出した土砂が男鹿川をせき止めた。崩壊した土砂の量は、現在の地形から判断して約 60 万立方メートルと推測される。さらに折からの降雨により男鹿川の水位はみるみる上昇し、五十里、西川地区に住む 31 軒の村人たちは、上の大地への避難を余儀なくされた。

当時、会津西街道 (国道 121 号) の交通も遮断され、通行人は山越えとなったが、駄馬の荷は山越えがかなわず、にわか仕立て筏で運搬した。

土砂崩落後、90 日間で村は湖底に沈み、湖は 150 日間で満水に湛えた。水深は、一番深いところで 47 メートルに達したといわれ

ている。

## 2. 五十里湖の水抜き工事

西川、五十里村に住む人々は、天災の影響を受けて窮乏生活を余儀なくされた。また、下流地域に住む人々にとっても、万一崩壊した土砂が決壊した時のことを思うと、なみなみ湛えた湖水を抜くことが切なる願望であったことは容易に想像できる。

五十里湖の出現から24年を経て、会津藩が水抜き工事の着手に乗り出した。請負額は4,375両、当時としては破格の金額である。

地元村人達の協力も得、工事が進められたが巨大な一枚岩盤に突き当たった。当時の工法では、岩盤の上でいもがらを燃やし、その後水をかけ岩盤を脆くして掘り進むような方法だったため、思うようにはかどらず、ついに工事中止となった。

この工事中止の責任を負い、会津藩士早川上糸之助と高木六左衛門という武士が割腹自殺を遂げた。葛老山崩落地点近くにある小高い丘、布坂山の頂上にこの藩士の墓と伝えられる小さな祀られている。この伝説から布坂山は腹切山とも呼ばれている。

## 3. 海抜けと大水害

享保8年(西暦1723年)8月10日、五十里湖出現からちょうど40年後、その一帯が暴風雨に襲われ、五十里湖の水位が著しく上昇した。そして、ついに上昇する水圧に耐えかね、ダム状に堆積していた土砂が押し流された。世にいう五十里洪水である。洪水は下流地方を席卷し、下野国(栃木県)では未曾有の大災害となった。直下流の川治村、藤原村は全村壊滅的打撃を受け、下流70ヶ村におよび12,000人(推定)もの人命や牛馬を飲みこんだといわれている。

## 4. 再び五十里湖の出現

第2次世界大戦後、再び五十里村が湖底に沈むこととなった。五十里ダムの建設である。これにより、66世帯85戸の住民が水没により移転を余儀なくされた。

五十里ダムは、洪水調節、発電及び灌漑用水の開発を目的とした多目的ダムである。

総工費48億円余りと約6年の歳月をかけ、昭和31年に完成した重力式コンクリートダムである。

五十里、西川地区に住む住民は、過去には自然災害と戦い敗れ、又現代においてはダム建設のため住み慣れた土地を提供し、また新たな生活の場を求めるといふ、激動の運命に生きてきたといえる。」

2-4 大谷崩れ(1707年)(新収補遺別巻, pp.151-157)

〔福井県史 資料編四〕S59.1.10 福井県編集・発行

(世事覚之帳) ○坂井郡三国町 久末重松家文書

一宝永四年亥十月四日大地震、大坂・四国・紀州津浪にて人多ク死ス、家等も大分つぶれ申候、東海道筋村々家ながれつぶれ申候、江戸方東ハさのミい(揺)らず、加賀方北もさのミゆらず、三十日程毎日少宛ゆり申候 (p.151)

(榎曲村年代記) ○福井県敦賀市 高木藤太夫家文書

一宝永四亥年十月四日大地震、郡中二人ハ不損候、同時大坂二津浪打人多ク死、同年富士山焼出、國中砂ふり宝永山と言山出来

〔解説〕高木氏は代々藤太夫を称し、榎曲村の庄屋を勤めた家である。榎曲村は、村高三七一石五斗二升五合の村であり、江戸時代を通じて小浜藩領であった。p.152

〔秋山家文書〕○静岡県安倍郡海ヶ島 森威史氏提供

仏山御林池成反別覚

仏山

一御林 竪 百五十間 横 六百間

内 竪八十間 横 六百間 程

此反別 拾三町三反百廿歩

右は拾七年以前亥ノ大地震以後毎年少々宛池ニ成埋り申候別而去ル八月満水ニ而大池ニ罷成埋り申候右池成之反別御改ニ付大積リ如此御座候 以上

享保八年八月 駿州安倍郡梅ヶ島村

名主 杢右衛門印  
組頭 佐七郎印  
同 兵左衛門印  
同 兵作印  
同 杢左衛門印  
同 藤兵衛印

御代官様

乍恐以書付申上候御事

一駿州安倍郡梅ヶ島村仏山御林之儀十六年以前亥ノ大地震之砌大谷川須押出シ右御林廻り池ニ罷成段々御林茂うまり申候尤其節御注進申候其後茂年々少々宛うまり申候得共別而当年満水ニ而又候あらず押込大池ニ罷成依之御林茂只今は三分二程うまり申候其節早速御注進可申上候得共前方茂大ニつき申候節ハ切レ申候ニ付見合罷在候所ニ今以切レ不申候右池長サ壱里余もつき申候故もはや日影沢三河内と申所ニ大勢百姓共住居仕申候得共右百姓共通路難成めいわく候尤二月ノ十月迄山道廻り仕候共冬中雪ふり旁々ニ而通路止り難儀仕候仏山御林之内諸

木池ニうまり枯木共数多御座候一兩年茂指置申候得共朽損可申上奉存候其内舟道具ニ罷成申候木一本被下置候舟ニ仕立通路仕度奉存候百姓之御救ニ以御慈悲右舟道具一本被下置候様ニ奉願上候 以上

梅ヶ島村

名主 杢右衛門印  
同村組頭 藤兵衛印

享保七年寅十二月

御代官様

(表書き)

「宝暦七丑五月仏山いもし山両御林御注進書下

藤兵衛六十式才時」

乍恐口上書を以御注進奉申上候御事

一当村仏山いもし山両御林之儀〔欠〕先年五拾年以前亥ノ年大地震以後大谷川大荒須押出し仏山之儀ハ子年方大池ニ罷成御林埋り初メ申候いもし山之儀ハ先年江戸町

平次と申者御薪木御用ニ不残伐出シ跡苗木小木共御座候処右大谷川近年別而いもし山御林江押懸申候処当月三日ノ八日迄大満水ニ而大分ニ荒須押出シ埋り申候年々少々宛埋り申候得共近年別而右両林段々ニ埋り申候尤前々茂御注進申上置候得共唯今ニ而ハ大分山も根返り過半埋り候ニ付反別等



図-4 大谷崩れ位置(Google earth より作成)

表-2 宝永地震での崩壊箇所

地点	山梨県身延町	静岡県富士宮市	静岡県静岡市	高知県越知市	山梨県早川町	
移動箇所名	下部・奥之湯	白鳥山	大谷崩れ	仁淀川鎌井	八潮崩れ	
土砂移動の特性	面積 (m <sup>2</sup> )	80,000	10,000	1,200,000	130,000	280,000
	土砂量 (m <sup>3</sup> )	1,200,000	5,000,000	120,000,000	4,200,000	14,000,000
	長さ (cm)	900	400	1,000	450	1,600
	幅 (m)	250	250	1,800	250	
	比高 (m)	360	350	1,100	270	
天然ダム	形成有	形成有	形成有	形成有	形成無	
湛水高 (m)	70	30	30	18		
湛水量 (m <sup>3</sup> )	3,700,000	5,600,000	4,700,000	29,000,000		
決壊時期	土砂埋没	3日後	徐々に堆砂	4日後		

茂過半減シ可申上奉存候

右御注進野儀早速申上度奉存候得共此度之満水ハ先月晦日此大水ニ而今以安倍川奥自由ニ不罷成御林見届ケ茂延引仕候得ハ依之御注進延引被成申候 以上

駿州安倍郡梅ヶ島村  
 百姓代 善左衛門  
 同代 重右衛門  
 組頭  
 名主  
 宝曆七年丑五月  
 小川新右衛門様  
 御役所

2-5 盛平山崩壊 (1718年) (新収日本地震史料第3巻)

〔飯田地方の地震と防災 一〕によると、1718年8月22日(享保3年7月26日)長野県飯田市を流れる、天竜川の支流遠山川において発生したのが盛平山崩れである。

「飯田地方の被害

飯田城下の長久寺の唐門が潰れ、城中も損所多かった。飯田市上川路開善寺の過去帳によると、一名埋没死している。役用古記録抄帳によると、飯田領分中で死者12人で潰家350軒余半潰580軒余と記されており、飯田

地方の被害甚大であったことが明白である。

郡内では遠山地方の被害が最も甚だしかった。信濃の南端和田宿のすぐ後に盛平山(森平山とも書く)があり、盛平山西方の一角が忽ち崩れ落ち、夥しい土砂、岩塊を押し出し、遠山川を堰きとめ、同時に主峰から分離した出山を現出した。(現在の南信濃村、和田小学校のすぐ北東方に聳ゆる小峰である)堰き止められた遠山川は漫々たる湖水となって一時に決壊し、濁流は滔々と西方に溢流し、一夜のうちに広い河原を作り、それが今の夜川瀬部落となった。……………

和田宿の片町家で5人が茶摘みに出かけていたが落下する大岩石の下敷になって圧死し、その供養塔が残っている。」(p.155)

同じような記述が南信濃村史にもある。

「和田城の西麓にあった盛平山の西方の一角が地震により崩れ落ち、夥しい土砂岩塊を押し出し遠山川を堰きとめ、同時に主峰から分離した一山を現出した。これが出山で和田小学校のすぐ北東方に聳ゆる小峰である。堰き止められた遠山川は湖水となり、一時に決壊し、濁流は滔々と西方に溢れ出し、一夜のうちに広い河原を作った。それが今の夜川瀬部落となった。以来、遠山川は前より数町も西方に移動し現在の川筋となった。此の大地震



図 44 盛平山の災害状況図と現況

(国土交通省中部地方整備局富士砂防事務所(2007):富士山周辺の地震と土砂災害より)

図-5 森平山, 出山, 夜川瀬の位置 (文献-5)



図-6 関連地図(Google earth より)

のとき、和田宿の片町家の五人は茶摘みに出かけていたが、落下する大岩石の下敷になって圧死し、その供養塔が残っている。」(p.182)

森平山(または盛平山、或いは森山)、分離して出来た出山、決壊後に一夜で作られた河原である夜川瀬などの位置は図-5, 6 に示されている(文献5)。

## 2-6 祖山崩壊(1750年)(新収日本地震史料第3巻)

寛延三年四月七日(1750年5月12日)に富山湾に流れ込む庄川でも発生している。合掌造り集落で知られる五箇山の祖山で、河口から約38kmの位置にある。

〔越中水害年譜資料〕によると、  
「(北陸俚伝記大意)

寛延三年(1750)四月七日大地震にて五ヶ山の祖山上崩れ、庄川上手水のまに、其水同月二十日巳の刻に一時に切れ、庄川大水と相成、大門、二口、赤江辺まで水付と相成」。(p.337)

図-7に示す祖山で、自然ダムが生じ、水が貯まり、13日後に崩壊し、河口から8km程度の地点でその影響を受けたのであった。



図-7 祖山, 大門 (Google earth より作成)

2-7 名立崩れ(1751年)(新収日本地震史料第3巻)

宝暦元年四月二十六日(1751年5月21日)、高田・越後西部に大地震が発生した。これを名立崩れという。

〔名立の歴史〕によれば、

「宝暦の大地震(名立崩れ)

寛延四年四月二十五日夜丑刻(八つ頃)大地震が起こり、高田領内、西頸城の東部が最も甚だしい被害があり、当地方の惨害は実に言語に絶するものであった。所謂「名立崩れ」のあった時である。この年の十一月に宝暦に改元されたので宝暦の大地震ともいう。

.....

名立谷では、各村で被害のない処はなく、小田島・平谷・東蒲生田附近は山崩れの為、名立川を堰き止めてしまったので、湛水が満ちて海のようになり、小田島は全村家屋破損して死者三八人、負傷者多数を出し、平谷村は全潰・半潰で被害を受けなかった者はなく、寺も二ヶ寺埋没してしまった。東蒲生田・池田でも山崩れがあり、その他の村落の被害、一々数えることが出来ない程であった。」

(pp. 480~481) 名立川の東5.5km程の所に流れ込む桑取川でも土砂ダムが出来、水が

貯まり、やがて破壊して下流で死者が出た。

〔訂正越後頸城郡誌稿〕によれば、

「郡内山崩破壊ノ内、別シテ西浜谷々浜方トモ大震ニテ居田村(朱印地)有間川宿ノ間甚敷、桑取谷ニテハ中桑取村地内ヨリ所々山崩ニテ桑取川所々水潮ヲナシ、夫レガ一度ニ押流シ、有間川駅橋場ニ出テ築キ性選駅内トモ河トナリ、為之五拾八人ノ災死アリ(当時人員貳百七拾人ノ村方ト云)」(p.515)

2-8 虚空蔵山崩れ(1847年)(新収日本地震史料第5巻別巻6-1, 6-2)

1847年5月日(弘化4年3月24日)に派生した善光寺地震では、長野県の虚空蔵山別名岩倉山が大規模な土砂崩れを引き起こし、自然ダムが生じ、それが遂に崩落して犀川・千曲川に大洪水を齎したことは良く知られている。新収日本地震史料第5巻別巻6-1, 6-2全1,834頁は、これに関する資料であり、さらに補遺別巻の323頁~407頁も善光寺地震に充てられている。

実際に発生した状況は長野県郷土史研究会の機関紙〔長野49号 1973年5月〕に掲載された高橋和太郎の(弘化四年善光寺地震の岩倉山崩について)が詳しい。著者の高橋和

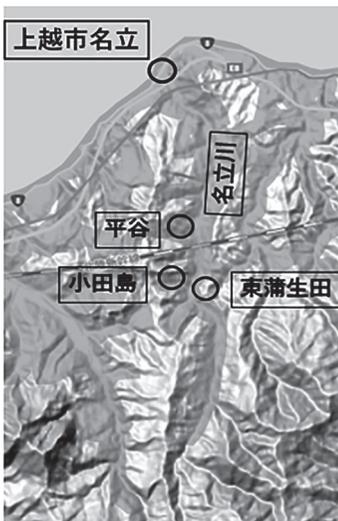


図-8 左図:名立川 右図:桑取川 (Google earth より作成)

太郎については、どのような人が調べられなかったが、1964年に創刊された長野県郷土史研究会「長野」に、1970年9月の第33号から1988年9月第141号まで、16編の論文を投稿している。

「(弘化四年善光寺地震の岩倉山崩について) 高橋和太郎

(前略)

岩倉山の崩壊

岩倉山は松代の西北十二 km 旧更級郡更府村字山平林にある山である。岩倉山とは通称であって、虚空蔵山というのが本当である。

地震当時この山の西山麓にあった岩倉という部落の名称を取って、虚空蔵山を岩倉山としたのであろう。この山現在は標高七六四 m である。善光寺地震前まではこの岩倉山の西麓には岩倉と孫瀬の二部落があった。岩倉山崩れの後に出現した面積二万 m<sup>2</sup> の湧池という池の名称をとって、この二部落を併せて湧池と称して現在に至っているわけである。

岩倉山の崩れた頂上の断屈面は現在でもはっきりと見えている。大方は雑木に覆われているが断層面の一部はよく判明できる。地質的には水成岩に属する砂岩である。京大本間先生調査による『中部日本の地質誌』による分類では第三紀層中小川層の砂岩である。

この砂岩層が岩倉山の頂上で東西の線に沿って真二つに割れて、西下方に向かって地じりを起し、それが犀川まで押出し、対岸の花倉部落の北方え突上げたわけである。

ために岩倉山の山頂は標高は 10m 乃至 20m 位低くなったであろうと想像される。この地じり規模の状況断面は図の通りであったと思われる。犀川を堰止めた土石量は八百万 m<sup>3</sup> と計算される。この地じりの際岩倉部落にあった柿の木が、対岸花倉部落にそのまま突上げて、最近までその柿の木は花倉の北の山腹に残っていたが、近時伐られて株だけ残っている。

『むし倉日記』による堰止堤の大きさをメートルに換算して図面に示した犀川ダムの大さは図の通りである。犀川河床からの高

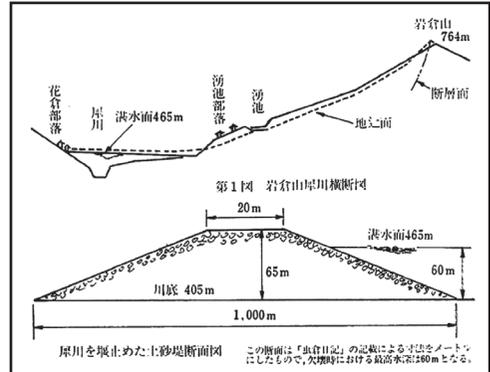


図 岩倉山崩壊、天然ダム断面図

さ六五 m、川の流れの方向に底巾で 1,000m 上の中で 20m、堰止堤の横長は 650m、に及んだ、と考えられる。この土石ダムが欠壊して一時に押出した時の水深は 60m である。欠壊はこのダムを水が乗越したのではなく、高さ 5m 位を残して未だ水が乗越さない内に巨岩土石の間を細流が滝となって流出し初め、それが次第に大きくなり遂に一時に押出す結果となった事は報告記録でもよくわかる。

#### 堰止堤の欠壊

岩倉山崩による犀川堰止堤の高さは河床から約 65m で、水深は 60m 位の処で欠壊して一時に押出した訳であるが、当時松代藩の役人が何人も見分を行い、河原家老に報告しているのを見ると、大方の見方は、家の大きさ程もある巨岩巨石が畳積しているのを見て、あれは一時に突破って押出すとは考えられず、滝となって追々少しずつ流れ出すであろうという説が多数見分者の見方であった。然し佐久間象山<sup>(修理)</sup>だけは唯一人説を異にしていた。あれは一時に押出すと力説、人力では及び兼ねるから地雷火を多く支掛けて早く水の流通を計るべきが上策と報告している。然し費用を多く要するために事止みとなった。

網徳も『むし倉日記』の中に『後にして思えば修理の説誠によく当れり』と述べているあたり、さすが象山は当時の科学者でもあったことがよくわかって興味が深い。

やはり同じ地震で出現した、岩倉より上流旧信級村の柳久保池は、周囲 4 km、深さ

35mもある湖で、現存しているが、この湖は地震後数年を要して満水したという程、流入河川が少く小さい細流であったから、一時に押出すことはなく、現在も細流が出ている位である。

然しながら犀川本流の場合は柳久保池とは状況が異って、大河である平時一秒間に100トン乃至120トンの水が流れているのである。高さ60m余の高低差を流れ落ちる勢は直径10m位の岩石は吹き飛ばす程であったと思う。象山の判断は誠に正しかったといってよい。

欠壊は四月十三日午後四時頃で物すごい勢で欠壊したようである。天地をゆるがす鳴動は松代に居ても雷鳴の如く聞こえたと、記録されている。その激流が山峡から川中島平に出る、小市においては水位20mに及んだという。平坦部に出ては扇状に広がり、西側は小松原、布施高田、御幣川、を経て横田に至り千曲川に入った。この時千曲川の水位は平水より6m増水したという。

夕暮近く松代より見渡した処、犀・千曲、両川の東西、北、中野方面まで一円水充滿して一大湖水の如く見えたという。

### 堰留湖の大きさ

湛水の日数は旧暦の三月二十四日夜から翌四月十三日夕方まで、十九日間である。堰止場所の水深60mに及んだ時の上流の湖はどんな状況であったろうか。筆者は上淀の各地の古老を訪ねて、その時の水の来た場所をそれぞれ確めて見た。信州新町の対岸旧牧郷村の竹房の高坂弾正氏（明三三年生）の話では、この部落では一軒だけ浮上るのが助かったという家を教えてもらったが、今も残っていて当時の浸水の跡が壁土にはっきり残っていた。この標高は465mにあたる。

旧日原村の鹿道では宮崎芳文氏宅の庭先まで湛水面が来たと、これは近隣の宮崎一氏（明三五年生）の話であるが、この標高は四七三mとなっている。同じ旧日原村の日名部落では山岸文好氏（明三六年生）がこの部落の最も高い所にある善竜寺の庭先まで湛水したという、この標高が四七五mにあたる。同村

置原<sup>ちほら</sup>ではやはりこの部落の最も高い所にある羽賀康祐氏宅の床下まで水が来た由、隣家の高橋学氏（明三一年生）が話してくれた。ここも標高四七五mにあたる。

置原より上流の途中調査は確めにくかったが、最上流の湛水地点である東筑摩郡生坂村の雲根では、吉沢寿治蔵氏（明三六年生）の話によると、自宅の床下まで湛水したと、祖父からはっきり聞いていた由、この家は国道十九号線が雲根部落の中で峠になっている最も高い所である。この部落はやはり大半浸水或いは浮上したわけである。この地点の標高は480mとなる。従って湛水の最上端は下生坂まで達したわけである。

岩倉の湛水面と雲根の湛水面との落差は一五mあったわけである。通常急激に堰止められた大河の上流湛水湖の水面はこの位の落差はあるはずである、必ずしも水平ではない。

以上の各点を甚にして湛水湖岸線を入れた図面が2図である。この面積は一七・五平方kmとなる、諏訪湖の1.2倍の大きさの湖が出現したわけである。

岩倉から下生坂まで河川延長で32kmに及んだのである。山峡部に於ける平時犀川の河川勾配は約300分の1である。つまり300mで1mの落差があるわけである。従って岩倉と雲根との河川勾配差は約1,000mあるわけである。『むし倉日記』にも見えているが、湛水の深さを新町辺で測ろうとして縄に重しを付けて下げてでも底は流れが強くうまくいかなかったと書いている。つまり湛水する様子は堰堤に向って、水位はたたみ掛けるように或勾配を以て流れ押しているということである。

今回の調査によりはっきりと、当時の湛水湖面は水平ではなく32kmの距離の間で15mの落差があったことがよくわかった。

参考のため現在の人造湖である水内ダムの上流湖面のことを聞いて見たが、平時で上流4kmまで湛水面が行っている。この落差は0.6mある由、これは発電しているので流入量と発電機を通る流出量とが同じ量の場合で

ある。これでさえ水平ではなく落差があるわけである。岩倉崩の場合は下流へ水も流出せずに溜り切りになっていたのであるから湖面に相当の落差のあるのは当然である。

(pp.805-808)

ところが、グーグルマップなどで探しても、長野市の岩倉山の場所が判らない。だが、文献6によると、

「1847年に生じた善光寺地震では水内郡下の数え切れないほど多くの場所で地滑りや山体崩壊が発生し、甚大な被害が出た。これらの中でも、長野市信更町の岩倉山（虚空蔵山）と中条村の虫倉山で発生した地滑りはその規模や被害の大きさから、最大級の崩落といえる。

岩倉山は信更町安庭の東に位置する山である。地震の際はこの山の南東斜面、南西斜面、西斜面の3カ所で大規模な地滑りが発生した。これらのうち、南西斜面で発生したものがもっとも大型であった。

写真は、この南西斜面で発生したものの遠

景写真である。（中条村 上長井付近から撮影）写真からも地滑り特有の馬蹄形の地形が認められるが、三方から大崩落した土砂は多くの集落や田畑を巻き込みながら崩れ落ち、下を流れる犀川を19日間にわたってせき止め、上流側（写真の右側）に32キロにわたる巨大な湖を発生させた。

その後、この自然堤防は決壊し、下流に二次的な災害をもたらした。崩落地の中央部に‘涌池’と呼ばれる池があるが、地震と同時に地面のあちこちから水が噴き出し、これが被害を大きくした、と古い記録は伝えている。

この池の湖底にも古い民家が眠っている。」とあり、数枚の写真が添えられている。

以上の記述に従って土砂崩れの場所を示したのが、図-9である。

図中、岩倉山の岩の字の下方にやや黒い部分があるが、これが涌池であり、グーグルマップで確認できる。

溜まった土砂を結局は人力だけで排除しようとした。その人数や、統率の仕方を匂わせる記事がある。



図-9 犀川・岩倉山など関連箇所地図（グーグルマップより作成）

〔徒然日記附地震大變録〕○長野県更埴市森中条聖命家文書（新収日本地震史料補遺別巻 p.341）には、

「人足ハ一日三千人ツト五色ノ吹流シ等相立陣かね陣太こ等相揃軍陣ニ不レ異よし

人足休ミノ相図ハ 鐘  
立チノ相図は 太こ  
食餌ニは 両方打まぜ也

右太鼓打方ノ役所ハ御藩中横田甚五左衛門弥々水口破るゝと成り候節ハ第一之上ニて鉄砲を打其次ノヶ所ハ下タ也其所ニて亦鉄砲を打と也其音を聞く時ハ下タなる人足逃ケ去ル合図と也」

そして遂には崩壊して洪水段波が発生する。文献2によると、

「地震直後、雪解け洪水で増水していた犀川の水は、天然ダムの背後に次第に貯留されるようになりました。コラム20の図2 信州地震大絵図には、岩倉山の湛水範囲と決壊後

の犀川を駆け下る洪水段波（犀川沿いに茶色で示される）と善光寺平より下流の洪水流が描かれています。犀川が善光寺平に出る部分は白色で示され、土砂が数mも堆積しました。

それより下流は、幾筋もの洪水流が描かれ、中野から飯山を通過して流下していることが分ります。図12は、天然ダムの湛水域推定断面図（中村ほか、2000、井上、2006）です。犀川の河床縦断面図の上に、岩倉山天然ダムの湛水範囲と決壊後の洪水段波の水位を示しています。天然ダムの湛水は徐々に上昇し、信州新町の集落を初め、30km上流の地点まで湛水しました。中村ほか（2000）や井上（2006）は、当時の史料や絵図をもとに、現在の地形条件から判断して、堰止高65m、湛水量3.5億 $m^3$ にも達したと推定しました。

そして、19日後の四月十三日（5月27日）に天然ダムは一気に決壊し、高さ20mにも達する段波となって流下しました。その結果、



図13 犀川丘陵の傾斜量分布図と岩倉山地すべりの湛水範囲（（有）地球情報・技術研究所 井上誠作成）

図-10 湛水範囲（文献7の図13）

下流の善光寺平のほぼ全域に氾濫し、大被害を引き起こしました。この大洪水は飯山から下流の信濃川まで流下しました。」

この文献 7 に図 13 として掲載されている湛水範囲図に岩倉山崩れの地点を入れたものが図-10 である。

このダム破壊による水と地形変化を数値計算で求めたのが松富英夫等である(文献 8)。

図-11 が其の結果の一つである。下流へは段波となって伝わった。上方に示された水位時間変化は、左図は江見、中図が笹平、右図が飯森で、これらは山林部の犀川であるが、段波の高さは 20m 以上、右下図が善光寺平に出た四ツ屋で、ここでも 10m 程の段波となっている。

この氾濫時に水だけではなく、火の災いを受けた例がある。

「・・・四月廿九日・・・」

○昨廿八日岩野村孫八方江立入同人話にて承り候先月十三日犀川上滞り水切之刻小松原切所にて水深サ拾壹間四寸有之しと聞候と孫八申聞候

○同孫八話右切口水押し流しの節川下モの村山と申近所にて口水人家へ突入と聞村方ノ大

家へ集り候所水嵩漸々加り候ニ付屋根を破つて外へ出んと蠟燭てらし屋根を破り候処誤つて其火屋根ニ燃付上ニハ火下ニハ大水其中へ落入有様水火ノ責にて生なから地獄入也と聞前代未聞ノ奇話也其昔越後の地震九州の津波ノ事聞も聞候也又善光寺如来ノ御庭ニ其横死追善の回向柱立ッてあり写し来ッて有之所今却て善光寺を始として其事ニ倍々増りし此節の事奇怪といふも余りあり」〔徒然日記附地震大變録〕(補遺別巻 pp.350-351)

また、虚空蔵山崩壊以外に地震時の溜池崩壊による水死者も発生している。

「青倉村友三郎後家はつ外七人儀はつハ右地震ニ而村内青倉川筋川上ニ而山抜有之泥水押し居宅流失致同人行衛不相知候付最寄を相尋土中ノ死骸掘出し百姓林右衛門女房くよ外忒人は同郡小菅村地内溜池堤ゆり崩し水押し出笹沢村は出水ニ而村内一円満水致候節居宅流失溺死致候ニ付死骸見当り引上候処右林右衛門倅惣吉外三人は行衛不相知全溺死致候儀ニ有之所々手配致し精々相尋候得共死骸見当り不申候千曲川通江流出候口哉又は土中江埋候哉も難計儀ニ而全災難逃潰家ニ而被打又怪我致し流水家溺死等相違無之銘々死骸片付之儀相願候而申立親類組合村役人共江も相

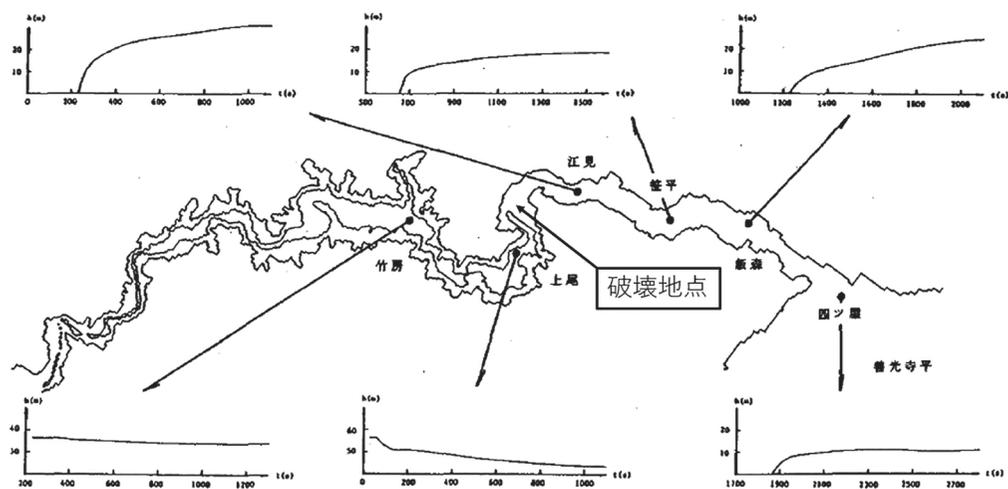


図-1 犀川の初期貯留水域と水位の時間変化

図-11 犀川での水位変化

糺候処一同申合候付外怪敷儀も無御座候間  
夫々死骸取置候様於場所申渡候段検使之手代  
申付候依之御届申上候 以上

未四月廿日 川上金五郎(ママ)印

[弘化四年信州大地震一件 三] (補遺別  
巻 pp.398 - 399)

2-9 鳶(とんび)崩れ(新収日本地震  
史料第5巻別巻4続補遺別巻)

安政5年2月26日(1858年4月9日)に  
発生した飛越地震は、多くの土砂崩れを起こ  
した。これを鳶(とんび)崩れと云うのは、  
図-11の富山県常願寺川上流の鳶山(とんび  
やま)付近の土砂崩れでできた自然ダムの崩  
壊被害が極めて大きかったからで、日本三大  
崩れのひとつとされる(文献9)。

近年の出来事であったから資料が多く、  
667頁にもわたる新収日本地震史料第5巻別  
巻4に加えて、新収日本地震史料続補遺別  
巻のpp.1177-1228に記載されている。また、  
最近のものでは、内閣府防災部門の防災情報  
のページから、災害教訓の継承に関する専門  
調査会報告書「1858飛越地震」(平成20年3  
月)として入手できる。

地震発生で生じた山崩れの状況、水が貯ま  
り、それが破れた時への警告が金沢市立図書  
館所蔵の[魚津御用言上留 第四冊](p.395)  
にある。

「一右地震ニ而立山温泉辺鳶岳山崩いたし  
湯川塞止、且又右湯川と真川と申川落合候下  
ニ而字千坊ヶ原と申御林之辺山崩いたし水塞  
止り流出不申躰ニ御座候、尤右川と称名川と  
落合夫々神通川と相唱候躰右川筋原村等方川  
筋村々へ右之趣順達いたし暨手先十村へも  
夫々御断候躰ニ而在々出水之心得方いたし罷  
在候躰ニ承合申候

一右湯川等一時二流出候時ハ富山様御城下危  
敷躰ニ而 彼方様方夫々御開合御詮義之上  
一昨廿八日夜四時頃過長門守様 御立退同  
御領小竹村善四郎方へ御越被為遊候躰、尤  
御家中へも出水之心得方夫々御触付有之候  
躰ニ承合申候

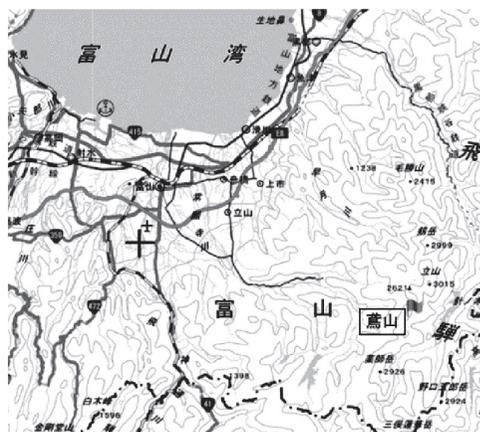


図-12 対象地域(Google earth)



図-13 洪水氾濫区域(文献10)に加筆

右奉言上候 以上

午二月晦日 立花源吾判

荻野茂右衛門判

自然ダムは3月10日、4月26日に崩壊す  
る。氾濫域は図-13に示す通りであり、3月  
10日の洪水は常願寺川の周辺のみに残まっ  
ている。ただし、この洪水で用水関連の施設  
に土砂が溜り、その排除に多数の人々が働き  
始める。4月26日の出水は、西隣の神通川  
にまで達する大きな氾濫をもたらした。

二つの洪水に対して、[大山史稿]は次の  
ように記している。

「三月十日 いよいよ常願寺川に出水した。  
これは溜の水が一時に溢れ出たため、川筋の

潰れた家が多かった。

四月二十六日 再び水が出て、このときは甚大な損害をうけた。「上滝野へ長サ八間余ノ大石流シ出ツ」というように、常願寺川は土に埋まり、川除土居より川底が高くなるという始末であった。

このとき、中番村、両男瀬口村、下番村では家屋が流れた。」(p.603)。

地震と自然ダム発生、崩壊、そして洪水氾濫の経過は〔新庄町史〕に、手際よくまとめられている。ただし、3月10日の氾濫では新庄町は被害がなかったため、洪水氾濫は4月26日のことしか言及されていない。

「安政五年二月十三日・二十二日(旧歴)と二度にわたる無気味なうなりを聞いたあと、ついに二十五日夜、越中の天地を轟かせる大地震が起ったのである。

この地震で、常願寺川の水源地大鷲山・小鷲山の西方が残らずふもとからくずれ、土砂、岩石が滑川それに真川まで閉塞し、いくつもの湖水をつくった。歴史に残る“トンビ山の大崩壊”である。」

崩壊箇所は田畑ほか(文献11)によると、

図-14に示すように、全部で65か所であり、図中、黒丸で示した11か所では、川をせき止め天然ダムが生じた。

〔新庄町史〕は続ける。

「こうして数十日間を支えたこの深山の天然の貯水池が、四月二十六日に至り、午後四時に一時に決壊。とうとうたる洪水は大土石流となって、天をもおおわんばかりの勢いで常願寺川扇状地に来襲した。洪水の本流は、町新庄で、東西二つに別れ、町新庄から荒川へと西へきりこんだ流れは、上富居、上下赤江、粟島、粟田、中島を埋没し、中島村(現在の富山市中島地区)で神通川に落ち合った。

上滝から東岩瀬まで、やく四十キロ余りの間で、流失あるいはつぶされた家屋千六百十三戸、流失土蔵八百九十六棟、溺死者百四十人、負傷者八千九百四十五人という惨憺たる被害であった。……

山田敏一氏は『新庄史稿』の中で美女で次のように新庄の被害を述べている。

『過去に、元和元年(一六一五年。新川神社を流す。その時出来た川筋を中川といい、中川の東に向新庄村が出来た。)、明暦二

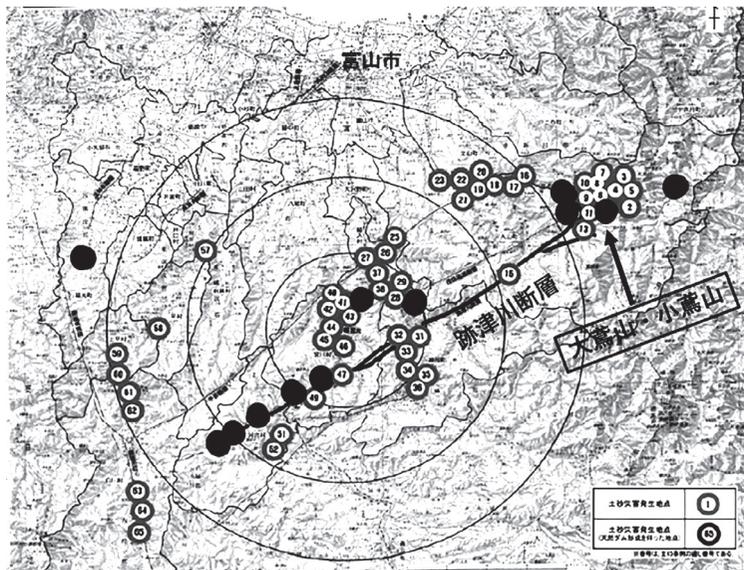


図2-10 飛越地震による土砂災害と天然ダム発生地点(田畑ほか, 2002)

図-14 天然ダム発生地点(文献11に加筆)

年（一六五六年。その時出来た川筋を荒川といい、川の西に荒川村が出来た。この時、町新庄、向新庄、荒川村に分れる。新庄に三名この時より始まる）と洪水があったが、安政五年の大洪水は前後にその例無き大水で、二月二十五日大鷲山（上新川郡大山町）俄然地震のために崩壊し、湯川を閉塞し辛じて数十日間を支えたが、四月二十五日夜（四月二十六日午前二時）に至り、深山の一大堰塞湖の水が溪谷の一角を突き抜いたので逆巻く泥流は宛ら天馬の空を奔るが如く激流岸を噛み、常願寺の左岸一帯の地を怒涛の荒れ狂うに任せ、十里の美田一朝にして荒蕪（あれはてる）に帰し、人畜の死傷、家財の流失あげて数う可からず。酸鼻（いたましいこと）の状、筆舌の能く盡す所にあらず、後世永くその惨況が語り伝うる所となった。新庄新町が濁流の瀬先に当り、最も凄惨（非常にいたましいこと）を極め、屋根の上に避難する間もあらばこそ、見る々々うちに家財諸共押し流され、上富居（かみふご）村の辺まで溺死者が多数あり、新町の寺子屋師匠盛田与右衛門の家も水難に遇うた。命拾いした者は古城跡の百足山つづきの丘の上にのぼり、辛うじて小屋を掛け一時を凌いだが大水が引いた後それまで新町にあった正願寺を始めとし、黒川、橋本、佐伯、宮嶋氏等が相次いで荒川の西に移転し、荒川、経堂まで町家が軒を並べ、綾田、田中も元村から街道筋に家移し西町（双代）の武具師の家も城の南方の川端屋敷から移転して来たので、川原の町並みが賑うに至った。』・・・・」。 (pp.614-615)

#### 挿話1 予言か

〔宮川村誌史料編〕(ハ) 安政のころ西忍の観音寺はしばらく無住のことがあった。たまたま寺へ留守居に来ていた僧の前田碩応が、あるとき「時日は分からんが、近くこの地に大揺れがある」と予言した。人々は大地震のこととは知らず「大揺れというのは何のことですか」と聞いたが、碩応はそれきり言わなかった。

去るに当たり吉四郎（清水梅三郎家）へ

小さな愛用の鉄瓶を提げてきて「この鉄瓶をしばらく預ってくれ。しかし私が二度と当寺へ戻らなかつたら、永久に使ってくれてもいい」と言ったが、碩応はそれきり寺へは戻らなかつた。（西忍 都下フサ談）

(p.102)

#### 挿話2 雀の大騒ぎ

〔地震見聞録〕

「阿原六郎右衛門と云ハ越中立山之湯元ニ而大百姓也、是者一ツ家立ニ而本村を離れ在住之由、廿五日之昼之間に屋根之上、雀幾百と云事無く集り、大きサワギ噪喋き鳴きたる由、尤常は鳥も来らぬ処之由、家族皆々怪敷、奇異之思ひをなしたる由伝承す、偶然の事かは知らねども、変なる咄故印(つら)す」(p.571)

地震は、先述では、「安政五年二月十三日・二十二日（旧暦）と二度にわたる無気味なうなりを聞いたあと、ついに二十五日夜、越中の天地を轟かせる大地震が起った」としているが、実は26日の午前2時に生じたのである。

#### 挿話3 戻ってきた倉庫

(リ) 川原地内字長とらの山崩れで、宮川は閉塞されてダムとなった。100メートルほど上流宮川左岸にあった高牧の山下左衛門四郎の板倉は、このため浮上し流れ始めた。階下に入れて置いた粃・稗・粟などの穀類は、浮遊中にことごとく流失してしまつたが、板倉はダムの逆流に乗って祐念坊の下まで流れて行つた。

三日後堰堤になつてた土砂が崩れ始めると、徐々に減水し、倉庫もだんだん下流へ押し流されて行つた。

山下家では、何とかしてこの倉庫が我が家の方へ舞い戻らないものかと、一心に神仏に祈つた。

ところが不思議なことに、その倉庫は元の屋敷に漂着すると、正確ではなかつたが大休元の土台石の上に座つたのでホツとした。

山下家では、これは一盾に神仏の加護によるものだとして喜び、元の台石に乗せて

復元した。

しかし漂流中、平家の落人の持物と言われ、祖先より伝えて来た太刀と槍は流失してしまった。(高牧 山下政雄談) (p.103)

#### 挿話 4 人力掘削の明暗

##### 4-1 明

土砂崩壊で流れが止まったのだが、これの開削に努め、自然ダムの発生阻止に成功した例がある。〔天災其他覚書〕には「○袴腰山・臼中山か崩れ小院瀬見まで土砂突出し、小矢部川上流を遮断し、下流二十三ヶ村人々夜通しに切崩し四日の晩方水の流るゝこととなり、」 p.597

##### 4-2 暗

3月10日の出水で、用水路が土砂堆積で被災した。その修復に働いていた人々が犠牲となった。〔立山町資料〕によると、「二十六日朝口時頃南の山々が崩れる様に鳴動し、人々が驚き叫んでいるうちに水はせきを切って流れ出た。濁流はとうとうとして水しぶきは天にみなぎり地にうずまいて水高八十尺。大木岩石も一拳に倒し、岩岬権現堂に口り上げて大釜をおし流し平地に出てはたちまち堤防をきり、西は三室用水・太田用水から鮎川・荒川そいに山室・石金・柳町・稲荷町・新庄を洗い流し神通川に流れこんだ。

東岸は岩岬から釜ヶ淵・大森・利田・三郷をなめつくし、上条・水橋にも及んだ。人々が疎開してしまった村々へも用水人足三百人が一拳に流される等暗やみの中一瞬に生地ごととなってしまった」(pp.600-601)

#### 挿話 5 氾濫の恩恵

なお、この大洪水のあとについて常川湜氏は、『新庄町史』の中で、次のように述べている。

「洪水のため、広田川(林十作・三鍋良三郎の屋敷地はその川跡なり)も埋没され、位置も改変(新庄役場敷地、現在消防署跡)され、被害地帯は泥濘(とんべどろという)を以て敷きならされ、凹凸は平均され、浅きも数尺深きは数間の土盛をされし如くで、現今稻田面の基礎を築き上げ、遠(さ

すが)に高确(こうかく)(石多きやせ地)卑湿(ひしつ)(低くして湿気があること)の瘠土(せきど)(やせたる土地)も、今日の美田と化せしことは、驚嘆の外はない。

現に洪水以前、鍋田・中富居(注:なかふご)辺りは、非常の瘠地で、時の人は、鍋田中富焼けつけ所、嫁もやるまい、嫁も娶るまい。

といいはやされた程、不味い瘠土であったが、洪水後は一変して、今日の美田と化したる如き、その一事をもつても証するに足るであろう。」(p.615)

鍋田・中富居は、常願寺川と神通川への距離が同程度の場所にある。

#### 挿話 6 海での遭難

「一 東水橋伊浦屋源左衛門せがれ台次郎同所四十物屋三蔵并同人二男菊次郎同所又吉同弥三郎共都合五人右三蔵所持之獵舟ニ乗組沖合江獵業ニ罷出居前件出水之砌川尻へ漕入候処瀬先と浪ニ漂候内右舟水中へ被卷込候故辺りに罷在候者共繩等を以助合候処三蔵又吉弥三郎三人助け候へ共右台次郎菊次郎儀ハ揚り不申溺死仕候躰ニ付夫々所役人江及案内候処即刻役人共罷出引綱等ニ而海辺為相尋候へ共死骸相見へ不申躰ニ承受申候」(p.407)

〔魚津御用言上留 第四冊〕にある原貞之丞によるこの言上の日付は3月14日であるから、3月10日の出水による遭難であったに違いない。

その時の常願寺川河口付近では、大きな渦が出来ていたようである。

「七ツ時頃方常願寺川おも川俄ニ出水仕水橋渡シ場辺ニ而ハ常水方五尺計相増尤前後共深キ泥水ニ而剩材木こもごも夥敷流れ来候処惣而右出水木汐を込上ケ東ノ方ハ泥水相流候処右川尻ニ而汐と泥水と流木等ニ而大輪ニくるくる相廻り莫太之出水何れも巻込行候哉難相分尤右川尻ハ乎生式尋余りならて立不申候所昨日之渦巻・・・一昨日右川渦巻候事も粗承り何歎ぬし之様成もの顔を出し候と申義も承り候間西水橋役人ニ相尋候所昨日七ツ時頃常願寺川おも川出

水七時過時分川上凡長四五間計も有之候鯨之如きもの流来水橋川足渡場方百間計も川下江流行候と其儘引返し逆巻候」

#### 挿話7 出水先端の色

「聞取之覚 入江村肝煎 伝右衛門申候

当日朝山之方鳴出追々鳴動仕一統打驚罷在候内四時頃廿六日暁之地震ニ指次候大地震仕四時半時頃又々大震仕右鳴動相近付夥敷地響キ仕候付如何跡之大変出来可仕哉と何茂打狼狽罷在候内川上之方ニ黒キ小山之如きもの相見へ来候付洪水とハ心得候へ共水色とハ事替何共分りかたく候処右黒キ山之如きもの段々近付候処夥敷川木ニ而山崩之土を以右川木を押来候義ニ御座候」(p.492)

小山のように見えたのは、段波状になった出水の先端で、木や泥で黒く見えたのあろう。

### 3. 津波の予想・予兆・前兆（新収日本地震史料第5巻別巻5-1, 5-2）

安政元年十一月四日・五日・七日（1854年3月23・24・26日）の東南海地震の際の記録である。

#### 1. 鳴った太鼓と阿弥陀の血涙

知多半島先端の沖合にある日間賀島の現安楽寺に起きたと伝えられる話である。

「○日間賀島大安寺曹洞宗当住入院之砌之由、島人話ニ往昔佐久之島と此島之間ニ大磯といふ島ありしか、大地震にてゆり込海中へ沈ミ今も潮之干潟ニハ其島之頂キ頭れ候、此嶋に伝りし阿弥陀の像ハ蛸の足にからまれて取上しを今に此寺に安置して氏神同様に祭りをいたし、其節ハ必干蛸を供へる例之よし、此辺人鄙律義ニして寺などに猥なるハ決してなく、火の改もあつたなどの如しと也、十一月三日の夜に氏神の太鼓人の業ならずして自然と深更に鳴り此寺の阿弥陀眼より血の如き涙をなかし給ふ、扱々氏神并阿弥陀の御告此島に何事か起ると見へたれハ、船持きの事ハ終日ハ壺人も出すして内を守るへしと触廻しけ

るに、其明日大地震になり、島中大事ニ不及安堵せしかハ、祭りを催し神酒をいたゞき大に祝賑せしと、右住持の弟料理人理助とか申者奥村兄へ来りて咄せしとそ」(p.51)

日間賀島観光協会のサイトには、

「その昔、地震で海に沈んだといわれる寺の仏像が引き揚げられた時、1匹の大ダコが仏像を守るように抱きついていたりとか。

以来、島民は仏像をタコ阿弥陀として祀り、今もなお大漁と安全、子孫長久を祈願しています。」とされているが、安政東南海地震での挿話は書かれていない。



図-15 日間賀島周辺地図  
(Google earth より作成)

この阿弥陀如来の由来について文献12は「魚阿弥陀様〈たこあみださま〉

昔々、島の漁師、茂二郎が大磯でたこ漁をしていると、なんと阿弥陀様を抱いた大きなたこを引き上げました。

大磯は、日間賀島と陸続きだったところで、そこには筑前寺という寺があったそうです。

ある時、その寺が大きな地震で海の中に沈んでしまったのだそうです。そこで茂二郎は、たこが抱いていた阿弥陀さんのことを思い出し、安楽寺におさめてみることにしました。するとそれからというもの、島では大漁の日が続いたそうです。

それ以来、この阿弥陀様は、『章魚阿弥陀』（たこあみだ）と呼ばれ、島の人たちの信仰を集めたそうです。」と記している。

#### 2. 海上の大山

「○大垣藩士某書状之中略……

一 豆州下田四日早朝より海中鳴動、四時頃

大地震、海上二烟の如き物にて大山式ツ出来、暫時釣候様ニ動き不申、又候地震鳴動ニ随ひ矢の如く飛来て、千式百軒の家数八分も河原と相成、夜ニ入海上赤く火の如く光り申候、大荒ニ付為御手当金二万両・米十万俵<sup>(公儀方)</sup>下田へ被下候由」  
(p.64)

「十一月九日

南鍋町

燈台職 大津屋九兵衛

小網町壺丁目横町嘉兵衛店清太郎  
後家むめ方同居 文吉

右九兵衛儀は筒井肥前守様之年来御出入仕罷り在、右文吉儀は同人弟子に御座候処、兼て被仰付候燈灯下田へ右兩人にて持参、先月廿七日出立、当月朔日着、右燈灯相納、同所岡方村江戸屋安兵衛方に止宿罷在候処、去る四日朝五ツ半時頃地震にて、安兵衛家族俱に山手へ逃出し居り候処、五ツ半時過湊の方に当り水煙夥敷上り候を見受、一同出火と存罷在候処、大津波押寄来り、湊地方にて深さ凡三丈程も有之、下田拾八ヶ町の外、木郷村辺壺丁半程軒別潰候儘相残、其余は町屋并男女とも何れへ押し候哉」(pp.121-122)

### 3. 地震直前の引き潮

「江戸地震

嘉永七寅年十一月四日朝四ツ時頃東南ノ方ヨリ地震ユルキ来り・・・・

深川高橋辺子供遊び居たりしを汐一時に満来り川中へ引込ける、あはわ(王)やと見る内川の川岸へ其儘打上けしにけかなし、大川端辺の船頭前夜船々へ荷物積入、今朝乗出さんと思ひ見るに、今朝ハ五ツ時四分ノ汐時ニ今其時過て汐来らず、是ハ如何ノ事と見る内ニ汐満来る様子只事ならず、出船見合へきや杯申内ニ地震ゆり来り人々驚き我家へ逃帰ルト也、其船々もやいの網自然と切て流れしと也我近所材木町の川俗ニ新場川も往来へ水上る事壺尺斗、家きハ迄ハ来らず、深川辺ハ余程水出也」  
(pp.237-238)

### 4. 予言する毘沙門天

〔旭市史二巻 近世北部史料編〕s48 旭市史編さん委員会

「(地震道中記)・・・・

一 本吉原村鎮守の神ハ毘沙門天神にて靈驗殊にあらたなる神なり、正月八日祭礼にて諸人群集するとぞ、此村数拾軒の家々一軒も地震の痛ミなく無難なり、霜月四日五ツ時里の小兒共毘沙門天神の御社に遊び居けるに身の丈高き異人現れ出て宣ふには、汝ら爰に居らば忽怪我すへし早く爰を去れと告給ふ、因て逃たる小兒もあり逃さる小兒をバ彼異人捕ひて側の竹藪江投給ふ時に大地震となりて其御宮潰れたり、少兒等少しも怪我なくして助かる、此神其頃里人の夢枕に立給ひて告給ふにハ、霜月四日の地震に氏子の人々が助けんがために官を出て働きし故に我体にニヶ所の疵を受けたり、我宮を出し故に我宮のミ潰れたりと告給ふ、因之速に仮宮出来たり、神の御慮有かたき事なり、こゝより吉原迄の間橋々落ちて人家多く潰れたり」(p.289)

### 5. 石活人の告げる天気

曾ての地震前の天気同様の天気のため、前もって避難し何を遁れたとの話。

〔青窓紀聞六十五〕名古屋市蓬左文庫によると、

「一 当国土佐界を海部郡と申候、此ハ南海ニ臨し漁人之住居いたし候浦々多く御座候、此辺地震最中洋より海水横溢いたし、十丈余之高濤一時ニ九ツ打寄、八九ヶ浦凡一万軒余も一時ニ捲去申、一軒も不残候、逃のひ候ものハ半分も可有之、余ハ海底の藻屑魚腹に葬られ候、悲痛の事なり、徳嶋より南五里海辺小松島・中田など千軒之町地震れ火事、僅ニ三軒残り申候由、海辺東へより候程波ハ低く、徳島近くハ一丈斗の波也、水にての死亡ハ免れ候へ共、地震滔水火事三災口鍊民無所措手足候

海部郡朝川村と申に石活人(イシイカスト)と云奇談有之、左之通当国白鳳年間とか地地震、海水横溢いたし溺死人多く有之、其変之後朝川之父老其変之前十日之天気合をケ様に

て地震洪水と委しく記し、其地之山頂自然石に鑿り後人に示し置候、此度之天気合ソレト符合いたし候故、朝川の人民五・六日前より家具を運び、妻子を携へ遠き山へ逃レ居申候処、果して地震沿水人家ハ一字も不遣襖去候へ共、人々溺死を免れ申候、古人の深切想像候而不已候、慕敷事也、右ハ海部より遁来り候者より直ニ承り申候、……

福生大和尚 侍閣下

十一月廿九日 鉄三郎 勤 呈」

(p.80)

#### 6. 引き潮を見て古老の助言

〔青窓紀聞 六十四〕名古屋市蓬左文庫

「○石町丸屋治左衛門とかいへる者西国・四国めぐりして十一月にハ土佐国へ廻り行、城下より四十里の西浜ヤス村と云所に泊り、十一月四日之朝の地震ハ強からずして遠かりし、何地か他国に強き所ありし末ならんと申居し程之事之処、五日も猶そこに宿し居たりしに、其夕七半時頃とおほしき頃地下大に鳴渡る事暫く間あり、人々騒ぎ立、おりしも頓て震ひ動く事夥しく、家之内を逃出、大地に着ても起居かたく地に伏て居し、其村二百軒斗の家凡転倒して、全く八纎に八軒、忽井水濁し、又浜辺・瀬水遠く引去るを見て、古老の者共スハヤ、津波よ逃よ一々々々といふ程に、うしろの山へ逃登るニ、はや沖の方立浪五丈もやあるらんと見へしか、そハに寄せ来るを男女老若あへぎてにけはしる、其後おり付々三度山際迄立寄を、三度目ニハ村辺の樹林皆水底にしつみて、一面の海湖と成る、其引時二抱三抱ともあるへき松杉などハしばらく立残り、其梢に芥など纎はかり流れけりて叢林人屋皆浪に引抱へて引行けん、今迄算を乱せし倒家の跡かたもなく、大地の肥土も皆浪の引めくりたりけん、田畑の分ちもなく只砂石の河原となり替り、此後畑に起すへき土気もなし」(pp.57-58)

〔大平年表録 二〕茅ヶ崎市柳島 藤間雄蔵家文書にも

「十一月四日四時頃相州真鶴湊より先々豆

州下田土津呂妻良子浦戸田之湊々水戸浦辺迄一面大地震ニ而……九ッ過少々地震やはらきたれハミなど内干濁となること凡壺丈余また希芙(?)のおもひをなしいかゞならんと驚き歎くうちに老人之いはく海水乾濁となる時ハ津波来ると伝へきく急速山に登べしといひ口けれハ親は子を負ひ若きハ弱きを助け家財雑具に目をかけず我も々々と高丘によち登り後見渡せハ樓の如く高サ五丈あまりの大津なミ湧がこくとくに襲来り家居倉稟は不及申立木迄もみる間に湊へ引出し又湊ニ繋ぎたる元船四艘山の半腹へ押あげ々々有様は今ぞ世家が減するかとおもふばかり更に生たる心地なく漸く夕かた津波静まりたれども反し波来るといふて麓に下るものもなく一連其夜を明しける翌五日こは々々麓に下り見れハ住馴し里にハあらずたゞ広野とハなりにけり

(p.352)

#### 7. 大出火の煙と見紛う津波のしぶき

「燈台職 大津屋九兵衛

小網町壺丁目横町嘉兵衛店清太郎 後家むめ方同居 文吉

右九兵衛儀は筒井肥前守様之年来御出入仕罷り在、右文吉儀は同人弟子に御座候処、兼て被仰付候燈灯下田へ右兩人にて持参、先月廿七日出立、当月朔日着、右燈灯相納、同所岡方村江戸屋安兵衛方に止宿罷在候処、去る四日朝五ツ半時頃地震にて、安兵衛家族俱に山手へ逃出し居り候処、五ツ半時過湊の方に当り水煙夥敷上り候を見受、一同出火と存罷在候処、大津波押寄来り、湊地方にて深さ凡三丈程も有之、下田拾八ヶ町の外、木郷村辺壺丁半程軒別潰候儘相残、其余は町屋并男女とも何れへ押流し候哉、……

一 同所武の浜に碇泊の魯西亜船、津波最中異人共大勢櫓へ上り相働候様子にて、大筒三度打発し候上、端船壺艘乗卸し候処、此船は何れへ流れ破損候哉、異人共も行衛相知不申候由」(pp.121-122)

#### 8. 津波の発した大音響〔仮題 書状集〕地震研究所・石本文庫

「京町堀にて家倒候方出火仕候得共白昼ニ御座候得は早速打消申候、五日申刻ニ又大動二刻はかり震、終る時西南之天ニて雷之如く太鼓之如き声一度響申候処他国之大地震之響と心得居候所、此時大津浪之音ニ御座候、此洪波川々江込上り、千石船五六拾艘一時に道頓堀川江飛込申候而地震を避皆々船ニ乗居候もの大船之下敷と成候者多く、死スもの数不知、(pp.280-281)

#### 4. 津波関連の地形や地名

##### (1) 式根島 (新収補遺別巻 p.131)

式根島は新島と繋がっていたが、元禄津波で現在のように切り離されてしまったという。

〔新島の歴史〕「伊豆諸島東京移管百年史」  
別刷 前田長八編さん委員

##### 2 若郷開村

.....

元禄十六年(一七〇三)十一月二十二日の房総沖の海底地震は大規模のもので、大島岡田村は近いばかりでなく、房総を向いているため津波による被害が甚大で、民家、回船、漁船が流出し、人命も五六人溺死している。遠い新島でも、従来陸続きであった式根島が、津波によって崩壊分離したのであった。

Google earth で確認すると、図-16 のように両島間は 2.6 キロも離れている。

こんな大変形が実際に起こったのであろうか。

文献 (13) によると、

「歴史 式根島には江戸時代の元禄大地震 (1703 年) の大津波によって新島から分離されたという説が流布されている。しかし、前年の 1702 年に作成された古地図 (新島村博物館所蔵) には新島と鋪根島 (式根島) がはっきり分かれて描かれている (新島村編纂の「式根島開島百年史」にも同様の記述がある)。逆に元禄大地震で両島が分離されたことを記した古文書は現在まで見つかっておらず、元禄大津波が原因で新島と式根島が分離された と断定することはできない。また、



図-16 式根島 (Google earth より作成)

新島村が 1996 年に編纂した「新島村史 通史編」にも以下の記述がある。

『新島と式根島が陸続きであったとする文書が突然明治 10 年になって現れている。(中略) 明治 5 年国地の企業家二人が式根島の払下願いを太政官へ提出した。これを知った新島が危機感を持ったのは当然であった。元来、式根島は新島島民にあっては庫島であって、これを国地人に奪われるおそれを持ち、式根島への移住を敢行することも真剣に討議されたのである。両島陸続き説はこの頃浮上したものであり、事実とはいうよりも、当時創作された主張とするほうが妥当なようだ。(後略)』

こうしたことから、式根島の所有権を本土の者に横取りされることを危惧した新島の島民が明治期に言い出した創作の可能性が非常に高いとされている。このように当事者である新島村が否定しているにもかかわらず、現在においても津波分離説は明確な根拠が示されないまま旅行ガイドなどで見受けられる。」



湧くの所旧井戸なり。

二 千尋崎より城の鼻(下川口)に至る一帯は往昔の陸地にして多くの田苑ありしが、地震のため陥落して海底となる。現在弁天島附近にある井出ざきと云えるは当時の井戸口にして弁天島は此の田苑の中央なり。

三 往昔地震に伴う津浪の災害跡として残る地名多数あり。

鯛谷 この谷まで鯛の泳ぎ来れり。奥益野

皿の峠 この峠は僅かに津浪に洗い残されし皿一枚あり。奥益野

はるめ峠 はるめの泳ぎ上りてありし。中益野

あかぼ谷 あかぼの泳ぎ入りし谷。平ノ段西の川奥

等々」(p.5)

実は白鳳とは、Wikipedia(文献 14)によると、「白鳳(はくほう)は、寺社の縁起や地方の地誌や歴史書等に多数散見される私年号(逸年号とも。『日本書紀』に現れない元号をいう)の一つである。通説では白雉(650年～654年)の別称、美称であるとされている(坂本太郎等の説)。」となっていて正式の元号ではないらしい。

また、天武天皇一三年(西暦六八五年<sub>(744)</sub>)となっているが、地震発生は西暦 684 年 11 月 29 日であった。

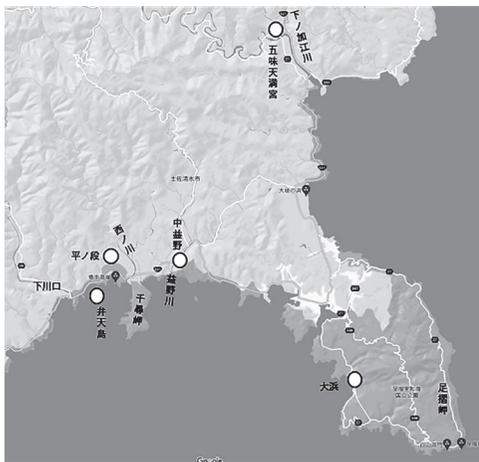


図-18 土佐清水市地名  
(Google earth より作成)

出てくる地名をグーグルマップ上で確かめたのが、図-18である。奥益野は確かめられない。また中益野と指定して出てきた地点には、下増野のバス停が立っている。

こがん峠、皿ノ峠、鯛谷、はるめ峠、あかぼ谷などの地点も明らかではない。もし、こうした地点を確かめられれば、この大津波の影響範囲を確かめられよう。

## 5. 終わりに

新収日本地震史料補遺別巻 1,226 頁のうち、106 頁まで読了し、それ以前のものをつなげて示したのが、本稿である。残りは続補遺別巻で 1,228 頁、地震としては、之までに既に記述されて居り、それらへの追記である。

## 参考文献

- (1) シリーズコラム 歴史的な大規模土砂災害地点を歩く  
コラム 4: 寛文二年(1662)の近江・若狭地震と町居崩れ  
いさぼう ネット <https://isabou.net/knowhow/colum-rekishi/colum04.asp>
- (2) 中央防災会議 災害教訓の継承に関する専門調査会: 1662 寛文近江・若狭地震報告書, p.37
- (3) 荒川秀俊: 恐るべきダムの崩壊 - 五十里洪水の例 -, 水利科学, 23 号, p.180-186, 1962.
- (4) 栃木県: 激動とともに生きる五十里 <https://www.pref.tochigi.lg.jp/h53/system/desaki/desaki/1182249442395.html>
- (5) 国土交通省中部地方整備局: 3-2 天竜川上流域の既往災害 [https://www.cbr.mlit.go.jp/tenjyo/flood/densho/pdf/tebiki\\_003.pdf](https://www.cbr.mlit.go.jp/tenjyo/flood/densho/pdf/tebiki_003.pdf)
- (6) 岩倉山地滑り <http://www2.ueda.ne.jp/~moa/iwakura.html>
- (7) シリーズコラム 歴史的な大規模土砂災害地点を歩く

- コラム 21 善光寺地震 (1847) による犀川の岩倉山天然ダム  
いさぼう ネット <https://isabou.net/knowhow/colum-rekishih/colum21.asp>
- (8) 松富英夫・浅田 宏・佐藤隆志 (1984): 移動床におけるダム破壊流れの氾濫計算, 第 28 回水理講演会論文集, pp.827-831.
- (9) 例えば, 鳶山崩れ, ウィキペディア, [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 鳶山崩れ](https://ja.wikipedia.org/wiki/鳶山崩れ)
- (10) 国土交通省 北陸地方整備局 立山砂防事務所: 安政 5 年の災害 - 常願寺川の災害と事務所の沿革  
<http://www.hrr.mlit.go.jp/tateyama/jigyo/river/syousai01.html>
- (11) 災害教訓の継承に関する専門調査会報告書:「1858 飛越地震」(平成 20 年 3 月)  
[http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1858\\_hietsu\\_jishin/index.html](http://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1858_hietsu_jishin/index.html)
- (12) 日間賀島について [https://www.himaka-kankou-hotel.co.jp/about\\_himaka/](https://www.himaka-kankou-hotel.co.jp/about_himaka/)
- (13) ウィキペディア式根島  
([https://ja.wikipedia.org/wiki/ 式根島](https://ja.wikipedia.org/wiki/式根島))
- (14) ウィキペディア白鳳  
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%99%BD%E9%B3%B3>